

特集 浜益小劇場ものがたり

浜益とお芝居との
運命の出会い

「セリフがなかなか覚えられない」「芝居中、頭が真っ白に」
時には苦しみながらも、仲間がいるから、
お芝居が面白いから、浜益にしかできないことがあるから、と
挑戦し続ける「浜益小劇場」に皆さんも会いに行きませんか？

「浜益小劇場」の脚本は、全て吉弘文人さん(59)が手掛けています。その数100作以上。「昔は年4回公演していたこともあった。狂ったように芝居をしていましたね」と笑って振り返ります。

千葉県出身の吉弘さんが初めて浜益を訪れたのは大学4年生の時。憧れの北海道で教員採用試験を受けた帰り道のことでした。バイクで来ていた吉弘さんは試験を終えると一路、利尻・礼文島を目指します。当時の国道は未舗装部分も多く、砂利道の峠を悪戦苦闘して走行。再び舗装路に出て、安堵したその時、目の前に現れたのが黄金山でした。周りに広がる田園と、雄大な暑寒別連峰の連なりを一目見るなり「俺、ここに住みたい！」と直感的に思ったんです」

その後、小学校教諭として恵庭へ。そこで驚くことがありました。小学生が学芸会と称して演劇をしていたのです。「私の地元では、小学生が劇を発表する文化がなかったんです。全く未知の経験でした」

ところが、翌年には自ら脚本を書くことを志願。やがて保護者たちと野外劇も始めるなど、吉弘さんはすっかり演劇の世界に魅了されていきます。

「るっつって何よお？」

浜益特産の海の生き物をテーマにした作品。主人公の少年が、祖父が昔よく食べていたという「ルッツ」が分からず、探し求めて全国を旅し、やがて千葉県富津にたどり着く…という物語。「これね、恵庭でも公演してね。面白かったんですよ」と佐々木代表もイチオシの作品です。



人の集まる場所をつくりたい

北海道に来て7年、吉弘さんはついに黄金小学校(旧浜益村・現在閉校)へ異動になります。そして赴任後まもなく校長から「村民演劇」の監督を打診されました。

旧浜益村では年に一度、村民文化祭で川下地区の主婦たちが中心となり、浜益の昔話をお芝居で披露するのが恒例となっていました。

そのサポート役として加わっていたのが当時の役場職員で、現・浜益支所長の宇野博徳(ひろのり)さん(54)でした。吉弘さんと出会い、宇野支所長は「この人となら面白いことができるー」と、すぐに家を訪ねて直談判します。年に一度と言わずにもっとお芝居をしよう、と。

「とはいえ、演劇にはこだわっていませんでした。私自身、演劇の『え』の字も知りませんでしたから。それでも過疎化が進み、村が寂しくなる中で、吉弘さんとなら人の集まる場が作れると思ったんです」

宇野支所長の圧倒的な情熱に押され、吉弘さんも快諾。この時、宇野支所長に誘われ同席していたのは、実田地区で米農家を営む佐々木茂雄代表(63)です。「正直、何の話か分からなかった」と苦笑しつつ、「どうだ、やらないか!」と言われて迷わず参加していました。